



自然、構造物の調和探る

県内200人の
小中高生ら

四万十川で意見交換

四万十市

【幡多】「四万十川下流域に学ぶ会」が二十七日、四万十市で開かれ、県内の小中高生らが四万十川の沈下橋などを見学。ワークショップを通じて、ものづくりの楽しさや自然との調和について意見交換した。

↑
小中高生や大学生が四万十川の風景について意見交換した（四万十市不破の市防災センター）

建設関係の専門学科がある高校や高専、大学でつくる県建設系教育協議会（草柳俊一会長）の主催。幡多農業高や宿毛工業高、同市や宿毛市内の小中学生、高知大や高知工科大の学生、教員ら計約二百人が参加した。

まず、四万十市三里から屋形船に乗り、三里沈下橋の下を通過して四万十川の風景をゆっくりと視察。各自が船上から好きな風景の写真を一枚ずつ撮影した。

その後、同市不破の市防災センターに移動し、十人ほどのグループに分かれてワークショップ。撮影した写真を四万十川の地図を描いた模造紙の上に張り付けながら、感じたことなどを発表。「ほかの川に比べて四万

十川にはコンクリート構造物が少なかった」「この自然を守らなければならぬ」「など、思い思いの意見を出し合った。

宿毛工業高三年の奥田貴幸君（ひ）は「今まで毎日のように四万十川を見てきよったけど、いつもと違う視点から橋を見ると、新しい発見があった。四万十川の大切さや自然をもっと知ってほしい」と話していた。

（横山仁美）